

2019 年度 A O 選抜 国際関係学部
「国際関係学専攻講義選抜方式」

【選考講評】

1. 実施状況

志願者数、合格者数等

学科・学域・専攻	志願者数	一次合格者数	最終合格者数
国際関係学専攻	50	20	7

2. 試験内容

(1) 第一次選考

第一次選考は、出願書類（エントリーシート）に記載されている内容にもとづき審査を行いました。エントリーシートは 3 つの欄に分かれています。

A 欄：国際関係学部を志望するに至った理由を、あなたの経験や体験を交えて記述してください。

B 欄：入学後に学びたい分野やテーマについて、具体的事例を挙げながら記述してください。

C 欄：卒業後の進路（就職や大学院進学など）についての希望を記述してください。

また、今年度から英語外部資格試験証明書の提出も併せて求め、基礎的な英語力の確認を行いました。

(2) 第二次選考

第二次選考では、講義を聴いたうえで 60 分のグループ・ディスカッションを行い、その内容を 20 分間にわたって小論文にまとめるという方式で行われました。グループ・ディスカッションのテーマは「今後、海外からやってくる人たちが増える中で、日本国内でも様々な議論が起こると予想されます。外国人労働者の増加は、どのような影響を日本へ与える可能性があるか、そしてそれらに対してどのように対応すべきか議論してください。なお、受け入れに賛成、反対どちらの立場でも構いません。」というものでした。小論文の問題は「グループ・ディスカッションを参考に、日本における海外からの労働者の受け入れについて自分の考えを述べてください。」というものでした。

3. 出題の意図・評価のポイント・解答状況

(1) 第一次選考

立命館大学国際関係学部の「国際関係学専攻講義選抜方式」入学試験は、本学国際関係学部を志望し、自分自身の観点から国際関係を考察し創造する

ことのできる能力に優れた人を受け入れるための入試方式です。つまり、単なる学問的な理解力や分析力だけではなく、自らの考えや意見をしっかりと持ち、それにもとづいて平和で豊かな新しい国際関係を創造していける人を選抜する試験です。したがって、「志望理由」も、受験生自身の経験や体験にもとづいたものであることが強く求められました。その際には、学習意欲や国際社会についての関心の度合いが評価の中心となりました。「入学後に学びたい分野やテーマ」に関しては、まだ入学以前の段階ですので、それほど細かく絞り込む必要はありません。「志望理由」で述べた経験や体験が、単なる印象にとどまることなく一定程度昇華して、国際政治や国際経済などの具体的な分野やテーマに結びついていった経緯をみました。また、文章表現の正確さや説得力、論理構成なども評価の対象としました。

(2) 第二次選考

第二次選考のグループ・ディスカッションでは、賛成・反対それぞれの立場から活発な意見交換がみられました。ディスカッションを傍聴していて大変興味深かった点は、最初明快だった「賛成派」「反対派」の立場が、議論が深まるにつれて相互に歩み寄り、論点を共有しあい、最後にはほぼ共通の認識を分かち合うほどに議論が成熟した点です。これはまさに、わたしたちが未来の国際関係学部生に期待しているディスカッションの姿であって、第二次選考に残った受験生の高い学力と社会関心の深さを物語るものでした。

議論は、日本政府、地域社会、外国人労働者それぞれにとってのメリット、デメリットを指摘しあい、整理することから開始されました。少子高齢化と労働力人口の長期的な減少傾向、異文化理解や地域活性化の可能性、送金による送り出し国の経済発展の期待などのメリットが指摘される一方で、現在の技能実習制度がもつ深刻な問題点、治安悪化への懸念、財政負担、地域社会との摩擦や差別など、様々なデメリットも指摘されました。意見の分布の点からいえば、「賛成派」が多数を占めましたが、その賛成意見はけっして単純なものではなく、法的・社会的・心情的な「受け入れ準備の不足」を十分に踏まえた上での長期的観点からみた賛成意見でした。したがって、デメリットに懸念を示す反対意見とも十分に交錯し、互いに議論の質を高めていく好循環がみられた点は、特筆に値します。

議論は最後に、政府による十分な法的整備、地域コミュニティとの交流プロジェクト、日本語研修制度の充実、緊急時の「駆け込み寺」の設置、人権意識を高めるキャンペーンなど、様々な具体的提案に結実しました。「受け入れるのは単なる労働力ではなく、人間そのものである」という一致点に到達できたことは、グループ・ディスカッションの大きな成果でした。これを踏まえて、議論への参加度合い、他の意見に対する理解力、それを踏まえた議論の展開力、論理的思考力、議論が行き詰った時の突破力などを総合的に評価しました。

小論文では、60分にわたる広くて深いグループ・ディスカッションの内容を、改めて秩序立てて整理し、自分の意見を確定していく作業を行ってもらいました。長時間の議論を踏まえたものでしたので、どの小論文もたいへんよくまとまっていた。その中でも特に評価の高かったものは、講義とディスカッションの内容をバランスよく整理したうえで、それに基づいて論理的かつ説得的に自分の立場と政策を提案するものでした。

4. 次年度受験生へのアドバイス

第一次選考では、日々の経験や体験の中に国際関係にかかわる事象を発見し、それを深く考え抜く能力が問われます。もちろん、その経験や体験というのは、長期留学や異文化体験だけを指しているわけではありません。ふとした日常体験の中にも、複雑な国際関係が色濃く影を落としているものです。まずそれに気づく力、持続的に考え続ける力、そして社会問題全般に対する問題意識を日々磨いていってください。

第二次選考では、講義の内容を正確に聴き取る能力がまず問われます。さらに講義の内容を踏まえて与えられたテーマにそったグループ・ディスカッションを有効に展開していくためには、様々な現代的課題に関する基礎知識と問題意識を日々磨いておくことが大切です。そして、友人たちと少しまじめなテーマでディスカッションする機会をできるだけ持つようにしましょう。司会進行役やまとめ役を引き受けてみることも大切です。一見対立する意見の中に共通点を見出したり、同じ意見だと思っていたのに前提条件が全然違ってびっくりした、といった体験をもってみましょう。国際関係学部で学習するためには、外国語能力が必要であることはもちろんですが、自国語で論理的に議論を展開することがなければ外国語でも読み書きはまともにできません。このことを是非受験する方にも認識してほしいと思います。

また、長時間にわたるディスカッションの内容を踏まえて小論文を作成するには、議論の要約力や論理的な文章作成能力も問われます。新聞やメディアを毎日欠かさずチェックし、国際的な問題、さらにそれが日本の政治経済社会にどのような影響があるか、などの点で特に教養的内容の書籍やドキュメンタリーを数多く眼にして、日頃から内外の課題となっている問題について深く考える習慣を身につけましょう。また、物事を客観的にとらえ、自分の考えを論理的に表現する文章作成の訓練も行っておくと良いでしょう。

以上